

大規模自然保護ゾーン地域

土地分類基本調査

柳井・室津・青島

5万分の1

国土調査

山口県

1979

序 文

わが国の経済発展は、その発達史上前例がなく、加速度的で、それは同時に都市・農村・漁村において過密・過疎現象を生み、深刻な社会現象を生じてまいりました。限定された国土に、このような二つの現象が生じてきたことに対し、これを計画的・合理的に利用することが、今のわが国にとって緊急かつ重要な課題となってきたのであります。このような現況と、将来における経済社会の基本的発展方向を示唆するため、地域の特性に応じ、自然と人間の調和をはかりながら国土を有効に利用し、開発し、保全するため国土調査が実施されているのであります。

今回、その国土調査事業の一環として、地形・表層地質・土壌等の土地条件、気象条件、土地利用現況、土地保全条件ならびに開発規制因子等を科学的・総合的に調査し、その実態を明らかにするため、当県においては昭和47年度以降これら土地分類基本調査を実施することになり、47年度「小郡」「宇部東部」48年度「宇部」「厚狭」49年度「西市」「小串」「安岡」50年度「山口」51年度「阿川・仙崎」「萩・見島・相島」52年度「須佐・飯浦」「徳佐中・津和野」「長門峡」53年度「徳山・光」「大竹」の作成をおこないました。

当冊子では、「柳井・室津・青島」図葉の地形・表層地質・土地および開発規制因子等について調査をおこなったので、この結果を有機的に組み合わせ、自然を荒廃させることなく土地資源の開発・保全・合理化・高度化のため、広く関係者が利用されることを切望する次第であります。

調査にあたっては、国土庁の助成と調整を得て、山口県土地分類基本調査作業規定に基づき、建設省国土地理院発行の縮尺5万分の一地形図を基図として図簿の作成、資料集収をおこないましたが、これにご協力いただきました各位に対し、深く謝意を表する次第であります。

昭和55年3月

山口県企画部長 高 山 治

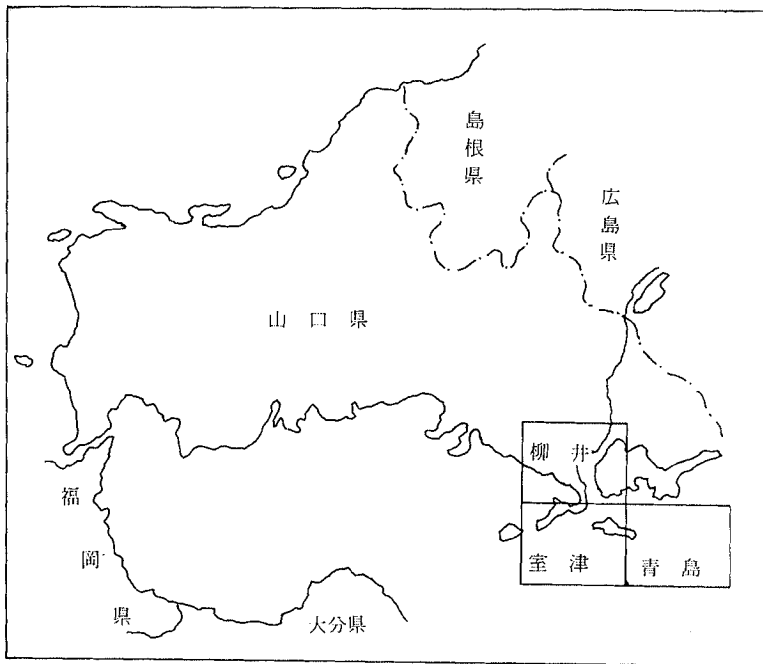
調 査 担 当 者

総括企画調整編集	山口県企画部企画課	課長	木村博之
	同	国土調査課長補佐	武波克己
	併任山口県教育庁指導課	指導主事	宇多村 讓
地形分類調査	山口大学	教授	三浦 肇
表層地質調査	山口大学	教授	河野通弘
		同	岡村義彦
		同	村上允英
		助教授	三上貴彦
		同	西村祐二郎
土 壤 調 査	山口県農業試験場	地力保全室 全長	井尻敏文
	山口県林業指導センター	専門研究員	藤原俊廣
傾斜区分図	山口大学	教授	三浦 肇
水系谷密度図	山口大学	教授	三浦 肇
土地利用現況図	併任山口県教育庁指導課	指導主事	宇多村 讓

目 次

I	位置および行政区画	
1	位 置	1
2	行政区画	1
II	地域の特性	
1	自然的条件	2
2	社会経済的条件	5
III	主要産業の概要	7
IV	開発の現状	9
I	地形の分類	
1	地形の概要	11
2	地形細説	13
II	表層地質	
1	表層地質の概要	27
2	表層地質細説	28
III	土 壌	
1	土壌の概要	34
2	土壌細説	37

「柳井・室津・青島」図幅位置図



I 位置及び行政区画

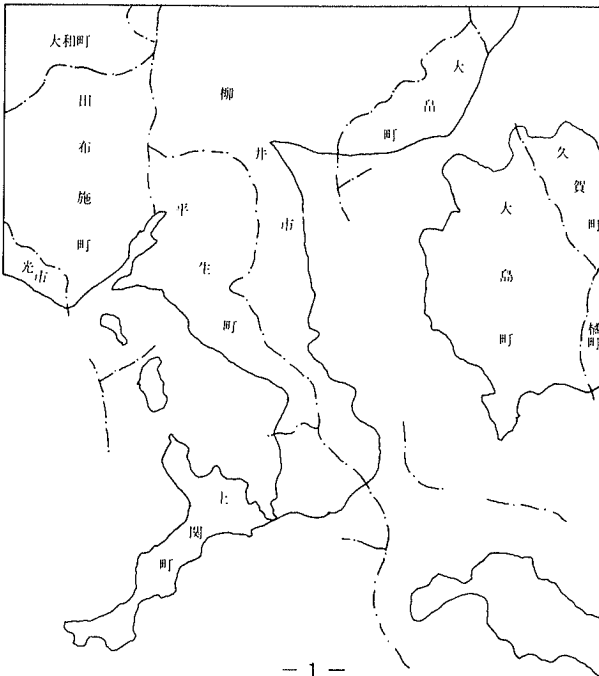
1 位置

「柳井・室津・青島」図幅は「柳井」「室津」「青島」各図幅を一括したもので、本州西端部、山口県内では瀬戸内海に面した最南東部で経緯度は「柳井」図幅が東経 $132^{\circ} 00' \sim 132^{\circ} 15'$ ・北緯 $33^{\circ} 50' \sim 34^{\circ} 0'$ 、陸地面積 247.62 km^2 「室津」図幅が東経 $132^{\circ} 00' \sim 132^{\circ} 15'$ ・北緯 $33^{\circ} 40' \sim 33^{\circ} 50'$ 、陸地面積 29.90 km^2 、「青島」図幅が東経 $132^{\circ} 15' \sim 132^{\circ} 30'$ ・北緯 $33^{\circ} 40' \sim 33^{\circ} 50'$ 、陸地面積 4.39 km^2 (山口県域)である。

2 行政区画

「柳井・室津・青島」図幅は柳井市・光市・田布施町・由宇町・大島町・東和町・上関町・平生町・大島町・大和町及び愛媛県長浜町よりなるが、光市は「光」図幅、由宇町は「岩国」図幅、東和町は「久賀」図幅で記述するものとし、ここでは、柳井市・田布施町・大島町・上関町・平生町・大島町・大和町の1市6町について述べる。

行政区画



Ⅱ 地域の特性

1 自然的条件

(1) 気象条件

瀬戸内型気候区に属している当地域の気候は、冬暖かく、夏冬ともに比較的雨の少ない気候である。

気温は、最高が8月で31.4度、最低が1月で0.7度、年平均気温は15.1度である。

冬季の天気はよく、晴天の継続することがしばしばあり、積雪量が20センチを越えることはまれである。7、8月には沿岸部では海陸風が発達するが、夕凧による蒸し暑さがつく。

降水量については、梅雨期の6月が最多雨期で、冬期は少ない。年平均降水量は1,717ミリで、瀬戸内中部の1,000ミリ以下にくらべるとかなり多い。

日降水量は、昭和48年には193ミリを記録している。

初降霜は11月2日、終降霜は4月2日、初雪日は11月21日、終雪日は4月1日を記録している。

平生観測所

1° C、1 mm (1966 ~ 1975)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均
平均気温	4.7	5.0	7.6	13.8	17.8	21.2	25.8	27.1	23.2	17.3	11.7	6.5	15.1
最高気温	9.9	9.9	13.0	19.1	22.9	25.3	29.7	31.4	27.5	22.5	17.2	12.1	19.6
最低気温	0.7	0.4	1.9	8.2	12.2	17.0	22.0	23.0	18.7	12.4	6.0	1.1	10.7
降水量	68	73	120	217	152	344	234	129	182	104	78	49	1,717

降水量及び最大日降水量

1 mm

	41年	42年	43年	44年	45年	46年	47年	48年	49年	50年	平均
—	1,314	1,402	1,638	1,712	—	2,644	1,396	1,894	1,715		1,717
150	69	89	106	147	98	179	193	124	154		131

月・日、日

年		40	41	42	43	44	45	46	47	48	49
		～ 41	～ 42	～ 43	～ 44	～ 45	～ 46	～ 47	～ 48	～ 49	～ 50
霜	初 霜	11.11	11.23	11.4	11.13	11.27	11.12	12.7	11.19	11.12	11.2
	終 霜	4.2	3.25	4.13	3.24	3.21	3.24	3.14	3.27	3.28	3.22
	降霜日数	41	53	36	26	18	21	25	47	49	29
雪	初 雪	12.16	11.21	12.8	12.16	12.3	11.29	11.29	11.30	11.19	1.13
	終 雪	2.23	3.23	2.25	3.13	3.19	3.14	4.1	2.24	3.26	2.22
	降雪日数	13	17	28	15	18	22	9	11	25	8

観測所の位置

所在地	設置個所	緯 度	経 度	海 抜 (m)
熊毛郡平生町	平生小学校	33° 56.1'	132° 04.2'	1

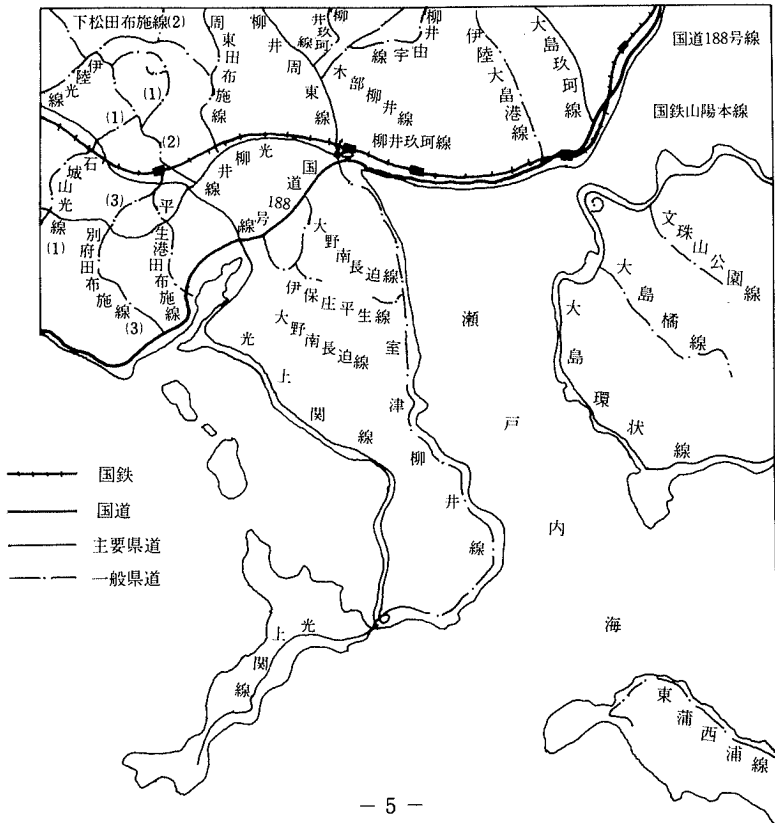
2 社会経済的条件

(1) 交通

国鉄1路線、国道1路線、主要県道5路線、一般県道17路線がある。

国鉄	山陽本線			
国道	188号線(岩国市～徳山市)			
主要県道	大島玖珂線	柳井周東線	大島環状線	光柳井線
	光上関線			
一般県道	佐田中田布施線	下松田布施線	飯山公園線	室津柳井線
	平生港田布施線	大野南長迫線	柳井由宇線	石城山光線
	伊保庄平生線	周東田布施線	柳井玖珂線	大島橋線
	別府田布施線	文珠山公園線	東浦西浦線	伊陸光線
	伊陸大島港線			

道路・鉄道位置図



(2) 人口の動き

昭和40年～50年にわたる人口、世帯数及び1世帯の構成人員の推移を5年間毎にみると、増加は大和町、減少は大畠町、大島町で、柳井市、田布施町、平生町は減少から増加に転移している。田布施町、平生町が45年～50年にかけて増加したのは、工場誘致によるものと云える。

人口・世帯数の動き

市 町	昭 和 4 0 年			昭 和 4 5 年			昭 和 5 0 年		
	世帯数	人 口	1世帯の 構成人員	世帯数	人 口	1世帯の 構成人員	世帯数	人 口	1世帯の 構成人員
柳 井 市	10,379	38,896	3.7	10,836 (1.0) 〔 457〕	37,774 (0.9) 〔▲1,122〕	3.4	11,815 (1.0) 〔 979〕	38,317 (1.0) 〔 543〕	3.2
大 和 町	1,589	6,713	4.2	1,834 (1.1) 〔 245〕	7,182 (1.0) 〔 469〕	3.9	2,106 (1.1) 〔 272〕	8,001 (1.1) 〔 819〕	3.7
田布施町	3,564	14,603	4.0	3,848 (1.0) 〔 284〕	14,547 (0.9) 〔▲ 56〕	3.7	4,401 (1.1) 〔 553〕	15,878 (1.0) 〔 1,331〕	3.6
平 生 町	3,381	13,362	3.9	3,610 (1.0) 〔 229〕	13,111 (0.9) 〔▲ 251〕	3.6	3,944 (1.0) 〔 334〕	13,796 (1.0) 〔 685〕	3.4
大 畠 町	1,329	5,309	3.9	1,382 (1.0) 〔 53〕	5,067 (0.9) 〔▲ 242〕	3.6	1,448 (1.0) 〔 66〕	5,024 (0.9) 〔▲ 43〕	3.4
大 島 町	3,548	12,959	3.6	3,541 (0.9) 〔▲ 7〕	11,545 (0.8) 〔▲1,414〕	3.2	3,561 (1.0) 〔 20〕	10,793 (0.9) 〔▲ 752〕	3.0

・ () は 5年毎の倍率

・ [] は 5年毎の増加数 ▲……負

Ⅲ 主要産業の概要

山口県の東南部で瀬戸内海に面した柳井市、大和町、田布施町、平生町及び大島町の40年～50年の10年間にわたる産業別就業人口の推移は第1次産業が大きく減少し、第2次及び第3次産業(大島町を除く)が増加の現象を示している。

減少した主なものは第1次産業の農業及び水産業で、このうち農業は田布施町の46%を最高に、平生町45%、大島町42%、柳井市40%、大和町35%、大島町27%の減をみる。

市町村の就業人口

市町村	年	産 業 別	総 数	第 1 次 産 業				第 2 次 産 業				第 3 次 産 業	そ の 他
				農 業	林 業	狩 猟 業	水 産 業	計	鉱 業	建 設 業	製 造 業		
柳井市	40		19,384 (0.9)	6,900 (0.5)	6	275	7,181 (0.6)	4	1,035	2,223	3,262 (1.4)	8,935 (1.1)	6
	50		19,169 [▲215]	4,123 [▲2,777]	7	208 [33]	4,338 [▲2,843]	19	1,432 [397]	3,371 [1,148]	4,822 [1,560]	9,982 [1,047]	27
大和町	40		3,606 (1.1)	1,547 (0.6)	5	—	1,552 (0.6)	9	316	605	930 (1.5)	1,115 (1.3)	9
	50		4,009 [403]	1,004 [▲543]	5	2 [2]	1,011 [▲541]	—	401 [85]	1,076 [471]	1,477 [547]	1,498 [383]	23
田布施町	40		7,519 (1.0)	3,298 (0.5)	5	63	3,366 (0.5)	19	444	1,016	1,479 (1.9)	2,664 (1.2)	10
	50		7,898 [379]	1,772 [▲1,526]	6	56 [▲7]	1,834 [▲1,532]	12	597 [153]	2,235 [1,219]	2,844 [1,365]	3,217 [553]	3
平生町	40		6,612 (1.0)	2,342 (0.5)	—	267	2,609 (0.5)	14	424	990	1,428 (1.9)	2,566 (1.0)	9
	50		6,932 [320]	1,273 [▲1,069]	3	176 [▲91]	1,452 [▲1,157]	3	607 [183]	2,150 [1,160]	2,760 [1,332]	2,696 [130]	24
大島町	40		2,487 (0.9)	584 (0.5)	2	219	805 (0.6)	2	142	453	597 (1.1)	1,083 (1.0)	2
	50		2,375 [▲112]	333 [▲251]	7	163 [▲56]	503 [▲302]	—	232 [90]	471 [18]	703 [106]	1,161 [78]	8
大島町	40		6,152 (0.8)	2,844 (0.7)	20	131	2,995 (0.7)	36	360	498	894 (1.1)	2,244 (0.9)	19
	50		5,360 [▲792]	2,072 [▲772]	8	97 [▲34]	2,177 [▲818]	7	407 [47]	571 [73]	985 [91]	2,196 [▲48]	2

・ () は 5年毎の倍率

・ [] は10年間の増加数 ▲……負

格、沖家室島の架橋の推進、室津半島の上関町から周南工業地帯に通じる交通体系の整備等が図られている。

生活環境については、都市化の進行、生活用式の高度化、観光客の増大に対処するため、上・下水道については、その整備をはかり、柳井湾の埋立地に終末処理場の建設を促進し、社会福祉施設については高齢化の進行に対処するため老人福祉センター6か所、小規模老人憩の家34か所、その他特別養護老人ホームの整備をはかる。

(宇多村 譲)

各 論

I 地形分類

1 地形の概要

「柳井・室津・青島」図幅は、山口県の南東端の地域を占め、「岩国」図幅の南に接している。本図内における海陸の配置、海岸線の形態は、山口県内のどの図幅よりも、もっとも変化に富んでいる。海岸線の特徴は一般に沈水性で沖積低地の発達が不十分であるが、ただ柳井―田布施―平生にかけてきわめて平坦な低地帯が見られ、これを境に本陸と室津半島が区分される。室津半島の西側には小島嶼が並列して分布し、周防灘と伊予灘の交界地帯に八島や平群島があり、室津半島の東側には柳井湾をへだてて、屋代島西部の主要部が位置し、複雑で変化の多い海陸配置を示す地域で、地形も各要素が多様に分布する点に特徴がある。

本図における最高点は、本陸側ではなく、むしろ島嶼側にあつて、それは屋代島の嘉納山 684.9 m である。これは花崗閃緑岩を基盤山地として、その上に載る輝石安山岩が相対的に硬岩の性質を示すために、これだけの高度を保っているものと考えられる。次いで本陸側の琴石山 545.4 m である。これはその北西の三ヶ岳 487 m とともに、この山地の高所は領家帯の縞状片麻岩の硬岩部分に相当する。次いで、室津半島南部の皇座山 526.7 m も新第三紀の輝石安山岩からなる中起伏山地である。このように本図幅の中起伏山地はいずれも差別的侵食の進んだ結果相対的に高所をなして残った硬岩部分に相当する。また、室津半島中央部高所をなす大星山 438 m、鳩ヶ峰 422.2 m は洪積世後半に噴出した輝石安山岩からなる小火山丘である。

田布施川の流域に発達している丘陵地は、「徳山・光」図幅や「岩国」図幅の島田川や由宇川の流域に見られる丘陵地と同じように、変成岩類からなる比較的大きい残丘群をとりまいて、花崗閃緑岩類のところに発達したものと相似の地形で、相対的には軟岩部分が小起伏化した丘陵地をなしているのであるが、田布施丘陵地の場合はその高度や形態が、砂礫台地（段丘）と区別しがたいほど低いことが特徴である。

本図幅の特徴のいまひとつの点は、沈水性の海岸地形の卓越するこの地域において、柳井―田布施―平生の低地帯の存在は特異である。柳井湾に入る烏皿

川も平生湾に入る田布施川もともに小河川であって、やや広い流域をもつ田布施川でも平生湾頭の埋積はあまり進んでいないし、この低地帯の成立には、田布施丘琴の高度の低いことともあわせ考えて、相対的に沈んだ地域としての構造的な要因をつけ加えなければならないようである。

さらに本図における地形配置の特徴として、北西—南東の方向性が顕著に認められるが、これはこの地方に卓越する断層構造の反映である。千坊山山地の海岸線と直線状に伸びる尾根の方向に並ぶ馬島や佐合島、長島北東部の方向、室津半島の方向、日積の河谷の方向と屋代島の屋代の河谷の方向などはそのよい例である。またこれと斜交する北東—南西方向の構造も副次的に地形上の特徴を与えている。

本図における地形の性状とその分布を説明するために、次の地形区に区分した。

I 山地

- | | | |
|-----------|-----------|-----------|
| I a 石城山山地 | I b 大平山山地 | I c 伊陸山地 |
| I d 琴石山山地 | I e 城山山地 | I f 錢壺山山地 |
| I g 嘉納山山地 | I h 馬ノ瀬山地 | I i 皇座山山地 |
| I j 杵崎山山地 | I k 赤子山山地 | I l 千坊山山地 |

II 火山地

- | | |
|------------|------------|
| II a 大屋山火山 | II b 鳩ヶ峰火山 |
|------------|------------|

III 丘陵地

- | | | |
|------------|-------------|------------|
| III a 大和丘陵 | III b 田布施丘陵 | III c 田尻丘陵 |
| III d 由宇丘陵 | III e 棕野丘陵 | III f 日見丘陵 |
| III g 大島丘陵 | III h 阿月丘陵 | |

IV 島嶼

- | | | |
|---------|--------------|----------------|
| IV a 牛島 | IV b 馬島・佐合島 | IV c 長島 |
| IV d 八島 | IV e 平群島・掛津島 | IV f 上荷内島・下荷内島 |

IVg 笠佐島

IVh 大水無瀬島・小水無瀬島

V 低地

Va 大和低地

Vb 田布施・平生低地

Vc 柳井低地

Vd 日積低地

Ve 棕野低地

Vf 三蒲低地

Vg 屋代低地

Vh 伊保庄低地

Vi 佐賀低地

2 地形細説

I 山地

Ia 石城山山地・Ib 大平山山地・Ic 伊陸山地

小規模な小起伏山地で、周辺に発達している 100 m 前後の高度の丘陵地をめぐらして、その中に残丘状にそびえる 300 m 前後の高度の山地であって、その山麓付近は下位の丘陵地や洪積台地との間に明瞭な傾斜変換線をもって境されている。石城山山地と田布施丘陵の関係、大平山山地と田尻丘陵の関係などとくにそうである。石城山は山頂一帯が小起伏をなし、平頂性の残丘で、山頂に石城神社があり、古代の山城神籠石の遺跡がある。伊陸山地も同様の性質の小起伏山地で、田尻丘陵や伊陸丘陵、由宇丘陵をめぐらして、300 m ばかりの高度の残丘状をなしているが、本図ではその南部が一部見られるが、柳井低地の一部、馬皿川の河谷に接している。

Id 琴石山山地・Ie 城山山地・If 錢壺山山地

日積の宮ノ峠一坂川の河谷と中山一殿畑の河谷の北西―南東方向の 2 つの断層谷によって、それぞれ断裂した地塊性の山地となり、さらに北東―南西方向に帯状（縞状）に配列する地質分布の影響によって、この方向に多くの侵食谷が発達して、山地の開析が進んでいる。とくに琴石山山地の北側（内陸側）斜面は山麓緩斜面の地形が発達し、三ツ岳の北麓では高度 200 m 付近、琴石山の北東麓では 300 ~ 400 m 付近に傾斜変換線が明瞭であり、15° 前後から 10° までのゆるやかな斜面をなし、水田化された小侵食谷に刻まれている。この緩斜面の末端は丘陵地に漸移するか、砂礫台地に連続している。

lg 嘉納山山地

屋代島の嘉納山山地は高度 684.9 mの嘉納山をはじめ、662 mの文珠山、624 mの源明山、618.5 mの嵩山（久賀図幅）など 600 m以上の高度を持ち、本陸側よりも高い山地である。「柳井」図幅の北に接する「岩国」図幅の最高点物見ヶ岳が 700 m、「柳井」図幅の西に接する「徳山」図幅の最高点烏帽子岳は 696.6 mであって、これら本陸側の中起伏山地に匹敵する規模の山地を屋代島はもっているわけで、注目すべきである。これは花崗閃緑岩からなる基盤山地の上に、新第三紀の輝石安山岩が、その高所一帯を占めているが、これは相対的に硬岩の性質をもつこの火山岩が侵食に対して抵抗性を示して、600 m以上の高度を保持しているのである。この下方に露われる花崗閃緑岩のところでは起伏も小さく、高度も低くなる。ただ、その境界付近ではいちじるしく急斜面をなすところがあり、それ以下に顕著な崖錐地形を発達させているところがある。たとえば文珠山北西斜面、文珠山南西斜面、嘉納山南西斜面などである。とくに神領付近は文珠山南西斜面の谷頭侵食によって生産された岩層が崖錐斜面とともにその下流に扇状地をつくって屋代谷を侵蝕するまでに張り出している。

lh 馬ノ瀬山地

嘉納山山地と同じように、基盤山地をなす花崗閃緑岩の上部に新第三紀の輝石安山岩を載せる中起伏山地であるが、屋代の河谷と柳井湾に挟まれた地壘性の山地で、屋代谷にのぞむ北東斜面は急斜面をなしているが、柳井湾側は山麓緩斜面や小起伏山地が山脚状にのび、西海岸沿いには高度 100 m以下の小丘陵も付着している。また、この山地の頂海山 454.8 mや馬ノ瀬 538 mの山頂一帯には平坦部が残っている。

li 皇座山山地

室津半島は中央の地峡部を境に南部の皇座山山地と北部の杵崎山山地に分かれる。皇座山山地はその大部分が新第三紀の輝石安山岩からなる中起伏山地で、北部では高度 180 m以下、西部で高度 100 m付近以下に花崗岩からなる基盤山地があって、この山地を縁ちどるのようにゆるやかな地形を

めぐらしているが、中腹は比較的急斜面をなし、さらに山頂一帯はかなりゆるやかな斜面をなし、一見トロイデ状の形態をとどめている。

1h 杵崎山山地

この山地は大部分花崗閃緑岩からなる丘陵性の小起伏山地であって、とくにその西斜面はゆるやかな浅い小支谷が樹枝状に山頂（山稜線）近くまで発達しており、きわめて特異な地形をもっている。また、この山地は北東—南西方向の断層谷が数列並んで切っており、たとえば上浜—長谷、瀬越—福井線などがそれであるが、とくに原、福井の直線状の急崖は断層線崖の地形と考えられる。

1i 赤子山山地

北側に柳井低地、西側から南側を田布施・平生低地にとりかこまれている残丘性の小起伏山地で、赤子山 230.6 m を最高点とする花崗閃緑岩からなる。北麓に山麓緩斜面の地形が見られ、100 m 以上が比較的急斜面をなして、急所に崖錐が発達している。杵崎山山地とは田布路木の低い鞍部で分かれて、ほとんど孤立した小山塊である。

1j 千坊山山地

「光」図幅の千坊山 299 m を最高点とする千坊山山地の東半部が本図幅にあらわれている。花崗閃緑岩や珪質片麻岩からなる丘陵性の山地であるが、北西—南東方向の断層系の影響で、同方向にのびる白石山と城山の2列の小起伏山地が並ぶ。開析が進んで、樹林状に侵食谷が発達しており、本図幅中ではもっとも谷密度の高い山地で、30/1 km 前後を示す。

II 火山地

IIa 大星山火山・IIb 鳩ヶ峰火山

室津半島北部の杵崎山山地のほぼ中央に、大星山火山と鳩ヶ峰火山の2つの熔岩円頂丘がある。大星山火山は箕山 409 m と大星山 438 m の、さらに鳩ヶ峰大山も鳩ヶ峰 422.2 m とその南の 400 m 丘の、それぞれ2つの円

頂丘からなる。なお両火山ともに西方に向って熔岩台地状の緩斜面がのびており、大星山には爆裂火口状の凹地も見られ、洪積世後半に噴出した新しい火山のようである。

Ⅲ 丘陵地

Ⅲa 大和丘陵

島田川と田布施川の分水界一帯に高度 100 m 前後を示す小起伏山地で、「徳山」・「光」・「岩国」図幅と本図幅（柳井）にまたがって分布する丘陵地で、他の小起伏丘陵に比べると、やゝ起伏が大きく、谷密度も高い傾向がある。

Ⅲb 田布施丘陵

田布施川の流域において、平生湾岸から大和町の三輪付近まで、高度 50 m～100 m を示すきわめて平夷な丘陵地で、小起伏丘陵の中でもっとも起伏が小さく、谷密度も低い、台地状をなす丘陵地である。おそらく沈降の結果促進されたであろうと考えられる、比較的中の広い埋積性の小支谷が無從的に入り込んで発達している特色ある丘陵地である。この丘陵地はその末端で洪積礫層を載せる台地に移るところもあり、また後背の山地との境界付近に洪積礫層の発達するところがあって、開析扇状地状の地形をなすところも見られ、残丘性の後背山地と丘陵との関係、低地の発達過程と丘陵内の谷の発達過程との関係などを知る上で注目すべき地形である。

Ⅲc 田尻丘陵・Ⅲd 由宇丘陵

田尻丘陵は島田川と馬皿川の分水界付近田尻を中心に発達している小起伏丘陵であり、由宇丘陵は由宇川の流域に発達している小起伏丘陵であるが、一部は侵食が復活して河川が穿入下刻して、起伏を増しているところもある。本図幅では、この田尻丘陵と由宇丘陵の南部が見られ、やゝ起伏を増した部分が馬皿川の流域にあらわれている。

Ⅲe 棕野丘陵

屋代島の北端棕野付近にみられる先領家花崗片麻岩は北大島花崗岩と呼ばれるもので、周囲の片麻状花崗閃緑岩とは異なるものであるといわれているが、この花崗岩の分布する地域はとくに小起伏山地や丘陵となっている。棕野低地を間にして両側の半島部に高度 100 m 以下に部分的ではあるが小起伏丘陵が見られるものを棕野丘陵とした。

Ⅲf 日見丘陵

屋代島西端の海岸沿いに見られる小起伏丘陵である。志佐から日見、横見にかけて、湾頭の低地をはさんで、断続的に分布する高度 100 m 以下の小丘陵群である。

Ⅲg 大島丘陵

これは主として、屋代島東部に見られる高度 200 m 以下の花崗岩からなる大起伏丘陵である。本図幅にはその西端部にあたると考えられるものが一部あらわれている。家房崎と法師崎の半島部に孤立的に分布するので、むしろ小起伏山地としてもよいと考えられるが、大島丘陵にふくめた。

Ⅲh 阿月丘陵

室津半島北部の東岸沿いに、伊保庄低地によって分断されて分布する小起伏丘陵で、高度 100 m 以下の小丘陵群である。屋代島西岸沿の日見丘陵とは柳井湾を間にして相対応する同じ性質の丘陵地である。笠佐島もこれにふくめられる。

IV 島 嶼

IVa 牛島・IVb 馬島・佐合島

馬島（面積 0.7 km²）・佐合島（1.37 km²）は花崗閃緑岩からなる丘陵性の小島であるが、牛島（1.99 km²）は領家帯変成岩からなるため、やゝ起伏のある小島で、海崖が顕著に発達している。馬島は 2 つの小島が砂州で繋がれており、その内湾側には塩田趾が残っているし、さらに芻島が陸繋砂州でつながれようとしている。

IVc 長島

長島（13.55 km²）は山口県下第4位の島で、最高点は上盛山 314.7 m であるが、この部分は輝石安山岩からなる。長島の北部は花崗岩からなる丘陵性の地形を示すが、中部は花崗閃緑岩、南部は珪質縞状片麻岩からなる。海岸沿いにまとまった低地はほとんどなく、沈水島の特徴をよくあらわしている。

IVd 八島

八島（4.35 km²）は大小3つの島が砂州によってつながったものである。南島は輝石安山岩からなる中起伏の山塊をなし、中央部と北部は黒色片岩からなる丘陵性の島である。

IVe 平群島・掛津島・IVf 上荷内島・下荷内島

大部分は新第三紀輝石安山岩からなる島である。その中で、平群島（面積 16.78 km²）は山口県第2位の島である。最高点は深山 468 m で、西部を除いて中起伏山地をなす。島の南西部に花崗岩のあらわれるところは傾斜がゆるやかとなり、水田や果樹園が立地している。

柳井湾口に位置する上荷内島・下荷内島はともにほとんど侵食をうけていない熔岩円頂丘の火山島である。

IVg 笠佐島

柳井湾の中央に位置する笠佐島（1 km²）は、片麻状花崗閃緑岩からなる島で、高度 115 m の小起伏丘陵をなし、柳井湾をめぐって見られる室津半島の東岸の阿月丘陵や屋代島西岸の日見丘陵と同じ小起伏丘陵の一部をなすものであると考えられる。島の沿岸には砂浜海岸がよく発達し、海水浴場として知られる。

IVh 大水無瀬島・小水無瀬島

平群島の東 10 km ばかりのところに位置する輝石安山岩からなる小島である。大水無瀬島の北端の丘陵部は黒色片岩からなる部分にあたる。

V 低地

Va 大和低地

大和低地は「光」図幅にまたがって、田布施川と島田川の分水界付近に発達した丘陵地内の小谷底平野や砂礫台地からなる。本図に見られるのは田布施川の上流の三輪と塩田の谷底平野と三輪と岩田の境界付近の砂礫台地である。田布施川の谷底平野には伊賀・源城付近には古代条里制の遺構と考えられる方格子割が残っており、開発の古いことがわかる。

Vb 田布施・平生低地

田布施川の谷底平野と三角州性低地、平生湾頭の干拓低地、大野の山麓帯の砂礫台地群などからなる。田布施川が小河川であり、沈水によって生じた深い平生湾の埋積はあまり進んでおらず、田布施の町並の東端付近で高度はなお2 m前後の低地帯となっている。山口県沿岸の他の例から推して、古代の海進を高度5～6 mまでと考えたとすると、田布施の町並の西端の定井手付近まで海面が入っていたと見なされるが、ここを境として下流に新田型の土地割が多く、その上流側の瀬戸、納所、才賀の谷底平野には条里型地割がよく残っている。平生湾の北部および東部には河川らしきものは見られず、ほとんど埋積の進まない内湾となっていたもので、近世初頭には高度2.5 m付近が海岸線であったと考えられ、それ以下の低地帯は旧藩時代に成立した干拓地である。

Vc 柳井低地

大波野から新庄、古開作に至る低地帯で、馬皿川の谷底平野もふくむ。大波野一新庄間の分水界は高度4 mばかりの低湿地帯であるから、沖積地の最大海進期にはこの低地は海面化していたと推定される。この低地帯の北側大平山の山麓帯と南側の赤子山の北麓下には、南北方向に舌状の洪積礫層をのせる台地が櫛歯状のびており、集落の立地に好条件である。とくに北側の余田の洪積台地は広く緩傾斜の台地をなしている。柳井低地の東方、琴石山山地の南麓には開析扇状地の段丘化した砂礫台地や新しい扇状地、崖錐が張り出して、緩傾斜の山麓帯を形成している。

Vd 日積低地

由宇川の上流の2列の断層谷の谷底平野である。とくに宮峠一坂川の谷では砂礫台地が琴石山山麓帯に沿って発達している。この並列する谷底平野はそれぞれ坂川と殿畑付近に谷中分水の地形をもつが、これは南東側（大島瀬戸）の低下（沈降）によって、由宇川上流のこの二支谷の谷頭部が裁頭されたために生じた地形で、一種の河川争奪地形であると考えられる。

Ve 棕野低地・Vf 三蒲低地

棕野低地も三蒲低地もともに、沈水海岸の湾入部に形成された湾頭の小三角州と湾奥の谷底平野からなるが、さらに湾岸に弓形に三角州を封鎖するように砂州が発達しており、谷頭部に砂礫台地（扇状状の開析されたもの）や崖錐斜面が形成されている。低地の規模は三蒲の方が大きく、この三角州低地には条里型地割類似のものが見られ、開発の古いことを推定させる。

Vg 歴代低地

地溝性の低地に起源をもつ沈水海岸の湾入部に形成された三角州性の低地と谷底平野からなるが、湾岸には小松塩田で知られた干拓地があり、河谷の上流部は中起伏山地の嘉納山地や馬ノ瀬山地の侵食谷からもたらされる岩層によって、崖錐地形や扇状地が連続して並んでいる。

Vh 伊保庄低地・Vi 佐賀低地

伊保庄低地は室津半島北部東岸の狭小な低地で、分散的な小谷底平野や小三角州性低地などからなるもので、伊保庄付近のものが比較的広い。佐賀低地は室津半島西岸の海岸沿の低地であるが、百済部、佐賀、尾国に分散的に分布する。佐賀は平坦な尾根状の段丘地形が数段にわたって発達している。百済部付近には平生湾口の小島を結ぶ陸繋砂州が工場用地として利用されている。

資 料

1. 高橋英太郎（1949）： 周防大島の地質・地形に関する二題
鉱物と地質 第14巻
2. 高橋英太郎（1953）： 西部瀬戸内海の成立——山口県第四紀編年——
地学研究 第6巻 第3号
3. 大島町誌編纂委員会（1959）： 大島町誌 大島町役場
4. 経済企画庁総合開発局（1973）： 1/20万 土地分類図 山口県
5. 山口県立山口博物館（1975）： 山口県の地質
6. 後藤陽一（1978）： 平生町史 平生町役場

（三浦 肇）

Ⅱ 表層地質

1 表層地質の概要

本地域の基盤岩をなすものは領家帯に属する変成岩類および花崗岩類であって、図幅の全域にわたって広く分布する。これらの内、花崗岩の分布が最も広く柳井図幅では全域におよんでいる。変成岩類は柳井市を中心に北東部地域、光市から室津半島および室津図幅の長島、八島に分布している。これら領家花崗岩類の末期の貫入岩に細粒花崗岩や石英斑岩があり、柳井市周辺、大島郡北部、石城山の北部まで各所に見られる。

基盤岩の侵蝕面上に瀬戸内火山脈に属する安山岩類の噴出が、大島郡、室津半島、長島、八島、平郡島など多く見られる。多くは火山円頂丘状の山体をなしているが、大島郡や室津半島の大屋山などは標高 400 ～ 500 m 以上、または 200 ～ 300 m 以上の山頂部を被覆しているのみで、噴出時以降隆起があり侵蝕により花崗岩の部分が削剥され山頂部を安山岩が覆うのみとなっていて噴出時の形状を残しているものはない。皇座山、八島、平群島は海岩線から山頂にいたるまで安山岩の山体である。大島郡南部には安山岩の岩脈が各所に見られる。

未固結堆積層として洪積層と沖積層がある。洪積層は本土側に台地や丘陵地をなす洪積層が各所に見られる。柳井市日積では標高 100 m 前後の盆地に発達し、柳井市から田布施町にいたる山陽線の両側には山麓からつづいて低い丘陵があり、侵蝕により舌状の突出した丘陵となっている。平生町の松尾、河内、大野南にかけ山麓に低い丘陵が分布する。西北端の三輪を中心に丘陵状の山地の上部に薄い洪積層が点々と残っている。

沖積層は海岸線の入り込んだ部分や小河川に沿って分布する。柳井一田布施一平生にいたる平野部に沖積層が拡がり、また柳井川、田布施川の流域の平地にも各所に見られ、多くは水田として利用されている。

2 表層地質細説

I 未固結堆積物

I a 砂 (S)

海岸線の入江となっている部分では、海岸線の近くは多くは白砂の砂浜となっている。

I b 礫・砂・粘土 (gsm)

沖積層をして平野を形成している部分は主として礫・砂・粘土の互層からなっている。海岸の入江の奥の部分、柳井一田布施一平生と一つづきとなっている平野の部分、柳井川、田布施川、屋代川の流域に多くは村落、水田として利用されている。

II 固結堆積物

II a 泥岩 (片状ホルンフェルス) (Rsm)

本図幅では南西端の光市井島にのみ分布する。泥岩はホルンフェルス化作用を受けており、岩質は泥質片状ホルンフェルスを主体とし局部的に緑色岩を挟む。黒灰色の片状構造の発達した弱いホルンフェルスで、剥離性が発達する。E-Wの走向を有し、傾斜は高角度でわずかに北に傾斜する。

II b 石灰岩 (Ls)

縞状片麻岩の中に挟まれたレンズ状の小岩体として分布する。白色の結晶質石灰岩であり、まわりにスカルン鉱物を生じている。琴石山付近、柳井市割石、大島町神領付近に分布している。

III 火山性岩石

III a 安山岩質岩石 (Ab)

瀬戸内火山脈に属する。いずれの山体も安山岩類および凝灰岩、凝灰角礫岩の互層よりなる。新第三紀の火山活動によるもので、噴出当時よりはかなり地殻変動や解折が行われたものと考えられる。安山岩は大部分が優黒質の輝石安山岩で所により玄武岩質の部分もある。大島郡飯の山は円頂

丘状の山体をなすが安山岩は山頂近く八合目から上部を花崗岩の基盤を覆っているにすぎない。文珠山—嘉納山—馬の瀬—頂海山と馬蹄形に分布が見られる。ここでは標高 200～400 mより上部に安山岩および凝灰角礫岩ないし集塊岩の互層が基盤を覆っている。室津半島の大星山、長島の上盛山も 200～300 mから上部は安山岩である。皇座山、八島の南半部、平群島などは海岸線から安山岩類である。平群島の南部から東部にかけては砂質、泥質の凝灰岩の互層が発達する。付近の上荷内島、下荷内島も安山岩である。

IV 深成岩

IVa 花崗岩質岩石 (Gr)

地域全般を通じていわゆる領家花崗岩類が分布している。花崗岩類には古期の花崗閃緑岩と新期の花崗岩に区別される。古期岩体が大部分の分布を占め、黒雲母の平行配列による片麻構造が発達する。中粒～粗粒の部分が多く、佐賀付近から大島郡戸田にかけては中粒～細粒である。主要鉱物は石英・斜長石・黒雲母よりなる。大島から日積にかけては縞状片麻岩と互層している。一般に塩基性の角閃岩を包有することが多い。縞状片麻岩や角閃岩と混成岩を作ることが多い。

新期花崗岩は室津半島の先端から長島の北部さらに横島にかけて露出し、中粒の白雲母—黒雲母花崗岩体である。平群島の東南端にも黒雲母花崗岩が露出する。その他柳井市片野、伊保庄、田布施町下田布施、大島郡の北部には細粒花崗岩の小岩体ないし岩脈が見られる。

IVb 斑岩 (Qp)

斑岩類としては石城山の山頂付近から北部の山麓にかけて石英斑岩が見られる。細粒、緑灰色でち密な岩石である。

V 変成岩

本地域に分布する変成岩類は領家変成帯に属する縞状片麻岩帯の岩石である。

Va 珪質縞状片麻岩 (Sgn)

大島町から柳井市にかけ、海岸線に平行に湾曲した分布をする。各所に片麻岩の構造と整合的にミグマタイト質花崗岩の層を挟む。

西部の馬皿から黒杭付近では分布が断片的になり、ついには花崗閃緑岩の中に尖滅するような分布を示す。南部では光市伊保木、田布施町別府とへて、室津半島の田名付近、さらにその延長は大島郡戸田付近までNWW—SEE 方向に断片的ではあるが連続的に分布が連なっている。長島の北東部および西部にもこの岩層が分布する。

岩質はチャートの構造をよく残しながら堅硬な縞状構造の発達した岩石である。

Vb 泥質縞状片麻岩 (Pgn)

珪質縞状片麻岩に挟まれた薄い層状の分布が所々に見られる。八島の北部および宇和島にも露出する。黒褐色で縞状構造のよく発達した、剥離性に富んだ岩石である。

Vc 塩基性岩 (B)

片麻状花崗閃緑岩に包有された優緑黒質、ち密な岩石で、多くは花崗岩化作用を受けて、混成岩を作っている。大島郡北部や大和町三輪付近には比較的大きい岩体がある。角閃石、斜長石、黒雲母よりなる角閃岩がある。

VI 応用地質

本図内には鉱山や温泉は存在しない。

室津半島先端近くの池の浦付近には安山岩の採石場がある。

資 料

岡村義彦 (1956) : 山口県大島郡の地質と岩石、領家変成岩ならびに花崗閃緑岩。

山口大学農学部紀要 No. 7 P 555 — 568

岡村義彦（1957）： 山口県柳井地方領家変成岩類および花崗閃緑岩類の構造、地質学雑誌 Vol 63 P 684 ～ 697

鷹村 権（1973）： 山口県大島付近の新第三紀火山岩類、岩鉱
Vol 68 P 329 ～ 340

（岡 村 義 彦）

Ⅲ 土 壤

1 土壤の概要

1.1 山地・丘陵地の土壤

本図幅は、瀬戸内海側に面した周南丘陵の南部地域と、周南島嶼の屋代島の西半分、長島、平群島及び八島などが包含される。その地形は領家変成岩からなる残丘性の小中起伏山地と、新第三紀の安山岩からなる中起伏山地及び、花崗岩からなる高度 100 ～ 200 m の平夷な丘陵地からなる。

土壤の分布は、これら山地・丘陵地を形成している基岩と密接な関係を示すほか、土壤の堆積様式と、微地形の違いに由来する水分環境の相違による土壤断面形態の特徴から、表の 3 統群、7 統に区分される。

乾性褐色森林土壤は、丘陵地、山地の山腹から山頂部・尾根筋にかけて広く分布し、山腹下部から谷筋にかけて、褐色森林土壤が出現する。

乾性褐色森林土壤（赤褐色）は、主として柳井平野周辺の洪積台地から丘陵地の緩斜面に出現する。この土壤は赤色風化の影響が見られ、下層は 5 Y R の色調を呈する残積土で、粘性が強い。

山地・丘陵地土壤一覧表

土 壤 群	土 壤 統 群	土 壤 統	土 壤 型 (堆積型)
褐色森林土	乾性褐色森林土壤	(1)右田岳1.2統(Mig1.2)	BA・BB-Er (残積)
		(2)糸臼山1統(Cha1)	BA・BB1部Bcを含む(残積一部衝行)
		(3)文珠山1統(Mon1)	BA・BB・Bc (残積)
	乾性褐色森林土壤 (赤褐色)	(4)小野統 (Ono)	rBA・rBB・rB (残積)
		褐色森林土壤	(5)右田岳3統(Mig3)
	(6)糸臼山2統(Cha2)		Bb-d・BD (崩積)
	(7)文珠山2統(Mon2)	Bb-d・BD (衝積・崩積)	

1.2 台地・低地の土壌

本図幅の低地は、柳井川、黒杭川、糸川、田布施川、大内川、屋代川、三蒲川の沖積地に分布し、市街地を除く大部分は水田として利用されている。

台地は、崩積性のものが各地に散在しており、水田、畑地、樹園地として利用されている。

本地域に分布する低地及び台地土壌は断面形態、母材、堆積様式から7土壌統群、31土壌統に分類される。

2 土壌細説

2.1 山地・丘陵地の土壌

土壌統群の分布特性は、総論でその概要を述べたので、ここでは土壌図に表現した個々の土壌統について、出現傾向、土壌特性ならびに、土地利用等について略述する。

乾性褐色森林土壌

1) 石田岳1.2統 (Mig 1.2)

花崗岩及び片麻状花崗岩を母材とする乾性土壌で、山腹上部から山頂部・尾根筋に分布する石田岳1統 (BA~BB~Er型・残積)と山腹の匍行土からなる石田岳2統 (BB~BC型)を包含する。A層はあまり発達せず、土性は砂土ないし、砂壤土で有効土層が浅い。アカマツの天然更新は容易であるが、生産性が低く表層侵蝕を受けやすいので、林地保全を前提とした施業が肝要である。

2) 茶臼山1統 (Cha 1)

片状ホルンフェルス母材とする乾性土壌 (BA・BB・BC型)で、山腹から山頂部にかけて広く分布する。母材は硬くて風化しにくく、一般に有効土層は浅い。材木の生育は不良でアカマツ天然生林となっている。

3) 文珠岳1統 (Mon 1統)

新第三紀の安山岩を母材とする乾性土壌 (BA・BB・BC型)で、粘土、シルト+岩塊+基岩の組合せをもつ風化断面を形成している。有効土層はやや浅く、下層は灰赤褐色~明橙褐色を呈し、腐植の浸透性は弱く、堅密に堆積している。

アカマツや広葉樹の天然林となっているが、アカマツはマツクイムシの被害を受け、広葉樹林化しつつある。

乾性褐色森林土壌（赤褐色）

4) 小野統 (Ono)

丘陵地や、山ろく地の緩斜面にあって、弱度の赤色風化の影響がみられる乾性土壌（rBb・rBc型）で、表層は、明褐色を呈するが、一般に浅く、下層は赤褐色（5 YR 5 / 6 ~ 5 / 8）を呈し、強粘質土壌である。アカマツは比較的良好に生育する。

褐色森林土壌

5) 右田岳 3 統 (Mig 3)

この土壌は、右田岳 1・2 統と同一地域の谷筋に出現する。崩落堆積母材のため有効土層は厚く、角礫を含む。土性は砂土～砂壤土で、透水性や通気性などがすぐれ、スギの植栽も可能である。

6) 茶臼山 2 統 (Cha 2)

この土壌は、茶臼山 1 統と同一地域の山腹下部や谷間に出現する適潤性の土壌（BD型）で角礫に富む。A層は暗褐色で腐植に富むが、B層への腐植の浸透はやや劣る。有効土層も 50 cm 程度とやや浅く、林木の生育はやや劣る。

7) 文珠山 2 統 (Mon 2)

この土壌は文珠山 1 統と同一地域の斜面下部や凹型斜面に出現する適潤性の土壌である。有効土層は厚いがやや埴質で礫をほとんど含まず、下層は通気性や透水性がやや劣る。A層は腐植に富み、団粒状構造が発達している。この図幅内では分布面積は少ないが、もっとも生産力に富み、スギ・ヒノキの造林地として適する。

（藤原俊廣）

資 料

1. 山口県林業試験場（1956～1968）： 民有林適地適木調査報告書
2. 経済企画庁（1969）： 土地分類基本調査 1 / 5 万（防府）
3. 経済企画庁（1973）： 土地分類図 35 （山口県） 1 / 20 万

2.2 台地・低地土壤

黄色土壤

本土壤は山地、丘陵地および台地に分布し、作土下の土層は黄褐色(色相7.5 YR またはそれよりも黄色く、彩度3以上)を呈する。山地斜面に分布する土壤は作土下または30cm以内から以下が礫層をなす場合が多い。

1) 大原統 (Ohr)

本土壤は台地及び山麓斜面に分布する黄褐色の畑土壤で、土性は強粘質である。腐植層序、酸化沈積物はなく、土層中に礫層、砂礫層及び礫を混在する砂層はない。

2) 八久保統 (Hku)

本土壤は台地及び山麓斜面に分布する黄褐色の畑土壤で、土性は粘質である。その他は大原統に準ずる。

3) 矢田統 (Ya)

本土壤は洪積台地に分布する黄褐色の畑土壤で、土性は強粘質である。腐植層序、酸化沈積物はなく、土層中に砂層、礫層、砂礫層はない。

4) 大代統 (Osi)

本土壤は台地及び山麓斜面に分布する黄褐色の畑土壤で、土性は壤質である。腐植層序、酸化沈積物はなく、土層中に砂層、礫層、砂礫層はない。

5) 菅出統 (Sug)

本土壤は台地及び山麓斜面に分布する黄褐色の畑土壤で、礫層または砂礫層が30cm以内から出現する。腐植層序はない。

6) 北多久統 (Kit)

山麓斜面または台地に分布する黄褐色の水田土壤で、土性は強粘質であり、土層中に斑鉄のほかマンガン結核を含む。未風化ないし腐朽礫を含むことが多く、60cm以下に礫層または未風化～腐朽岩盤が出現することもある。表層に腐植層はない。

7) 新野統 (Ara)

台地または山麓斜面に分布する黄褐色の水田土壤で、土性は粘質であり、土層中に斑鉄のほかマンガン結核を含む。未風化ないし腐朽礫を含むことが多い。

8) 都志見統 (Tsm)

台地または山麓斜面に分布する黄褐色の水田土壌で、土性は壤質であり、土層中に斑鉄を含む。未風化ないし腐朽礫を含むことが多い。

9) 氷見統 (Him)

台地または山麓斜面に分布する黄褐色の水田土壌で、土性は強粘～粘質であり、礫層が30～60cmの間に出現する。

10) 土佐山統 (Tsy)

台地または山麓斜面に分布する黄褐色の水田土壌で、土性は壤～砂質であり、礫層が30～60cmの間に出現する。

細粒灰色低地土壌

本土壌は、作土下の土色が灰色～灰褐色を呈し、土性は強粘～粘質である。この土壌の灰色または灰褐色土層は、水田土壌化作用によって変成したB層で斑鉄を含みときに鮮明なマンガン結核がみとめられる。

11) 佐賀統 (Sag)

低地に分布する灰色水田土壌で、土性はほぼ全層が強粘質であり、斑鉄のほか顕著なマンガン結核を含む。

12) 藤代統 (Fji)

低地に分布する灰色水田土壌で、土性はほぼ全層が粘質であり、斑鉄は含むがマンガン結核はなく、構造もない。

13) 鴨島統 (Kam)

低地に分布する灰色水田土壌で、土性はほぼ全層が粘質であり、斑鉄は含むが、マンガン結核はなく、構造がある。

14) 宝田統 (Tak)

低地に分布する灰色水田土壌で、土性はほぼ全層が粘質であり、斑鉄、マンガン結核、構造がある。

灰色低地土壌

本土壌は低地に分布する灰色～灰褐色の水田土壌で、作土下50cmの平均土性が壤質よりなる土壌である。

15) 加茂統 (Km)

低地に分布する灰色水田土壌で、土性はほぼ全層が壤質であり、マンガン結核はない。

16) 清武統 (Kyt)

低地に分布する灰色水田土壌で、土性はほぼ全層が壤質であり、斑鉄のほか顕著なマンガン結核を含む。

粗粒灰色低地土壌

本土壌は低地に分布する灰色～灰褐色の水田土壌で、作土下50cmの平均土性が砂質よりなるが、または30～60cm以内もしくは30cm以内に礫層または砂礫層が出現する土壌を包含する。

17) 追子野木統 (Okk)

低地に分布する灰色水田土壌で、土性は壤～砂質であり、礫層が30～60cmの間に出現する。

18) 豊中統 (Toy)

低地に分布する灰色水田土壌で、土性はほぼ全層が砂質よりなる土壌である。

19) 国領統 (Kok)

低地に分布する灰色水田土壌で、礫層が30cm以内に出現する。

細粒グライ土壌

本土壌は表層が灰色土層、下層がグライ層よりなる土壌と、全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壌のうち作土下50cmの平均土性が強粘質または粘質よりなる土壌を包括したものである。

20) 富曾亀統 (Fus)

全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壌で、土性は強粘質であり、斑鉄は30cm以下に存在しない。

21) 田川統 (Ta)

全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壌で、土性は強粘質であり、斑鉄は30cm以下にも存在する。

22) 西山統 (Nis)

全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壌で、土性は粘質で

あり、斑鉄は30cm以下に存在しない。

23) 東浦統 (Hig)

全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壤で、土性は粘質であり、斑鉄は30cm以下にも存在する。

24) 浅津統 (Aso)

表層は灰色土層、下層がグライ層よりなる土壤で、土性は粘質であり、土層中にマンガン結核は存在しないが、構造がある。

25) 三隅下統 (Mis)

表層は灰色土層、下層がグライ層よりなる土壤で、土性は粘質であり、土層中に顕著なマンガン結核があり、構造もある。

グライ土壤

本土壤は表層が灰色土層、下層がグライ層よりなる土壤と、全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壤のうち、作土下50cmの平均土性が壤質よりなる土壤を包括したものである。

26) 芝井統 (Sib)

全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壤で、土性は壤質であり、斑鉄は30cm以下に存在しない。

27) 滝尾統 (Tko)

全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壤で、土性は壤質であり、斑鉄は30cm以下にも存在する。

28) 新山統 (Nii)

表層が灰色土層、下層がグライ層よりなる土壤で、土性は壤質であり、構造はない。

29) 上兵庫統 (Khy)

表層が灰色土層、下層がグライ層よりなる土壤で、土性は壤質であり、構造がある。

粗粒グライ土壤

本土壤は表層が灰色土層、下層がグライ層よりなる土壤と、全層もしくは作

土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壌のうち作土下50cmの平均土性が砂質よりなる土壌と、土層中30～60cm以内もしくは30cm以内に礫層または砂礫層が出現する土壌を包括したものである。

30) 琴浜統 (Kot)

全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壌で、土性は砂質である。

31) 深沢統 (Fka)

全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壌で、土性は強粘～粘質であり、土層中30～60cmの間に礫層が存在する。

(井 尻 敏 文)